

ハンセン病に関する薬学的キリスト教文化研究

——レビ記の遵守によってハンセン病患者を 隔離から解放できた——

野 田 康 弘*

要 旨

旧約聖書のレビ記には重い皮膚病に関する記述がある。重い皮膚病の語源はヘブライ語のツァラートで宗教用語である。翻訳過程でギリシャ語のレブラ、ラテン語のレプラへと機械的に置き換えられていった。ラテン語の聖書が使われていた時代に当時の医学者が聖書のレプラをハンセン病の一部の名称にあてはめたため、医学用語としてのレプロシーが派生した。その結果、ハンセン病に対する偏見が世界中に広まり、聖書の記述がハンセン病患者を隔離することの名分になったとされている。ハンセン病は結核と同様に治療法の無い時代が続いたが、20世紀に治療法が確立してからも隔離による差別が漫然と続けられた。旧約聖書の祭司たちは重い皮膚病の隔離をレビ記13, 14章の規定に基づいて行っていた。ハンセン病患者は皮膚が雪のように白くなることはなく、顔面や四肢に外傷性的変形すなわち障害が残るという特徴がある。しかし、レビ記13, 14章の規定には、顔面や四肢に障害をもった者は重い皮膚病に当たるとは記載されていない

* 金城学院大学薬学部准教授

い。レビ記21章に顔面や四肢に障害をもった者は神に食物をささげる務めをしてはならないと記載されているのみである。もし、聖書の読者がレビ記21章の規定を遵守したならばハンセン病患者を隔離から早期に解放できたのではないかと考えられる。

はじめに

ハンセン病は世界各地で認められる病気である。ドイツハンセン病博物館の資料によれば、ジュリアス・シーザー（ローマ BC100-）、ナポレオン・ボナパルト（フランス 1769-1821）、フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー（ロシア 1821-1881）、ウラジーミル・イリイチ・レーニン（ロシア 1870-1924）、これら歴史上の人物はハンセン病に苦しんだとされている。1873年にアルマウエル・ハンセン（医師、ノルウェー）によって原因菌のらい菌 *Mycobacterium leprae* が発見された。らい菌が増殖する至適温度は30～33度であるため¹通常の培養条件では生育せず、病原性が動物実験で明らかになるまでに発見から100年近くを要した。衣服の下での皮膚温度が十分上昇しない寒冷地は、らい菌にとって条件の良い環境である。犀川によれば、ミイラの発掘研究によりパレスチナ地方にはもともとハンセン病はなかったが、アレクサンドロス3世による東方遠征（BC326）によりハンセン病が持ち込まれた²と考えられている。聖書の中の重い皮膚病はハンセン病とは病理的に異なるものであると結論付けられているにもかかわらず、かつては聖書に「らい病」と書かれていた。現在、新共同訳聖書の訳語は「重い皮膚病」に改められているが、長い間、聖書の中にらい病の文字が存続し、人々に誤った理解を与え偏見を植え付けてしまう結果となった。

本論文では、その偏見の構造について新共同訳聖書の記事と犀川の報告を参考に検証する。

狭義の重い皮膚病の症状

新共同訳聖書では、従来「らい」または「らい病」と記載されていた箇所は、おおむね「重い皮膚病」に置き換えられている。重い皮膚病にかかった人物について旧約聖書の記述を見る。

まず最初に登場するのが、神の召しに対し躊躇したモーセが重い皮膚病にかかった記事である。「手は重い皮膚病にかかり、雪のように白くなっていた」³とある。次に、モーセを非難して神の怒りをうけたミリアムは「重い皮膚病にかかり、雪のように白く」⁴なった。金銭をだましとったゲハジは「重い皮膚病で雪のように」⁵なった。いずれも皮膚そのものが雪のように白くなったか、皮膚に雪のような粉状のものが出現し、皮膚が白くなる症状が共通している。レビ記において重い皮膚病の疑いがあるかどうかの判断基準⁶として発疹あるいは湿疹が白いかどうか、患部の毛が白いかどうかが挙げられている。重い皮膚病が何を原因とした病気であるのかを特定するまでもなく、雪のように白くなる皮膚症状を呈する皮膚病であることは明らかである。

重い皮膚病の鑑別

皮膚に湿疹、斑点、疱疹が生じ「重い皮膚病」かどうか疑わしいときは祭司がそれを判断することになっている⁶。現在の皮膚科の診療においても皮疹の状態を肉眼で観察し記載することで診断にいたる⁷。一言に皮疹といっても、丘疹、紅斑、紫斑、結節、水疱、びらん、潰瘍といった性状を示す用語で分類される。現代にあってもこれらの皮膚症状を色調、大きさ、形態、分布などを観察し記載する。この点は旧約聖書の時代に祭司が行った方法と類似している。肉眼で見ているからと言って曖昧なものではなく、客観的に各々の皮疹の症状について皮膚所見が言葉で記載されるという点

で理論的なものである。しかし、実際の皮疹では必ずしも単一の皮疹が現れるとは限らない。色調、形態、性状が入り混ざっており、個々の症例によって多様性を示す。レビ記における皮膚病の用語についても、「湿疹、斑点、疱疹、発疹」^{6,8}とある。現在の病態解釈では、湿疹は皮膚の炎症状態を指す。小水疱を伴うこともある。斑点は皮膚上の点や傷を指す。疱疹はヘルペスによる水疱を指す。湿疹と疱疹は水疱を伴っているかどうかで区別しているような印象を受ける。斑点は湿疹の初期症状あるいは皮疹の治った跡と見ることもできる。皮疹と発疹は医学上同義語である。皮疹を細かく区別しないときは、皮疹全般を一般用語として湿疹と呼んでいる。このように現在においても皮膚症状を説明する用語は多様であり、統一された用語で記載することが難しい。したがって、レビ記における「湿疹、斑点、疱疹、発疹」は似たような皮膚症状を説明していることが示唆される。

ただれ⁹は医学用語でびらんを指し、水疱が破れる等により表皮が剥離し真皮が露出した状態を指す。白癬¹⁰は白癬菌属 *Trichopleuris* による表在性真菌症を指し、いわゆる水虫、たむし、いんきんである。

重い皮膚病の判定のアルゴリズム

レビ記13章に書かれている皮膚病が重い皮膚病であるかどうかを判定するアルゴリズムについて論じる（図1）。

発疹が白くなり、患部の毛が白くなる皮膚病が生じた時、それが皮下組織の深くにおよんでいるかどうかで判断された⁶。皮膚表層の組織は、表皮層と真皮層でできている。真皮層の下に目の粗い線維帯があるのが皮下組織である。皮下組織は緩い組織なので皮膚をつまみあげることができる。皮膚の表層に症状がとどまれば皮膚をつまみあげることが可能であるが、皮下組織にまで症状が達すると皮膚がしこりのように固くなり、もはやつ

まみあげることが困難になる。症状が皮下組織に深く及ぶ時（図1A）、重い皮膚病と判断された。症状が皮下組織に深く及んでいないときは合計で14日間¹¹隔離して症状が広がるかどうかを見ることにより皮下組織に達しているのかどうかを観察し、判定したと考えられる（図1B）。

重い皮膚病がただれる（図1C）、すなわち皮膚にびらんが生じると、それは慢性皮膚病⁹と称された。重い皮膚病からの経過なので慢性の重い皮膚病が正しい表現ではないかと考えられる。ただれた肉が白くなっている（図1D）ならば清いと判断された¹²。びらんは赤みを帯びているが表皮が形成され新しい皮膚で覆われると、皮膚の色調が白色を呈する¹³。新しくできた皮膚にはメラニン色素が少ないため白くみえる。このことから、びらん様皮膚症状が治癒したことを説明していると考えられる。

炎症のある場合¹⁴や、やけどの跡の場合¹⁵は、最初の症状において赤みがかっているのが特徴である。白癬の場合¹⁶は、黒い毛がなく薄黄色の毛であることが特徴である。これらの場合も、細かい点を除けば、図1のアルゴリズムに従う。

重い皮膚病とは区別されている皮膚症状

白皮症¹⁷は重い皮膚病ではないと宣言された。現在では、白皮症はメラニン産生を司る遺伝子に異常があるため生じる皮膚の色素欠損症のことを指す。前述の「ただれた肉が白くなっている」症状も新しくできた皮膚にメラニン色素が少ないため、結果として皮膚が白色を呈していたと考えられる。もし、皮膚の表面の色調が白色であることだけを条件に重い皮膚病と判断すると、誤りが生じる可能性がある。そこで白色の皮膚症状が進行性のものであるかどうかを正確に判断するために14日間観察をする措置がとられたと示唆される。

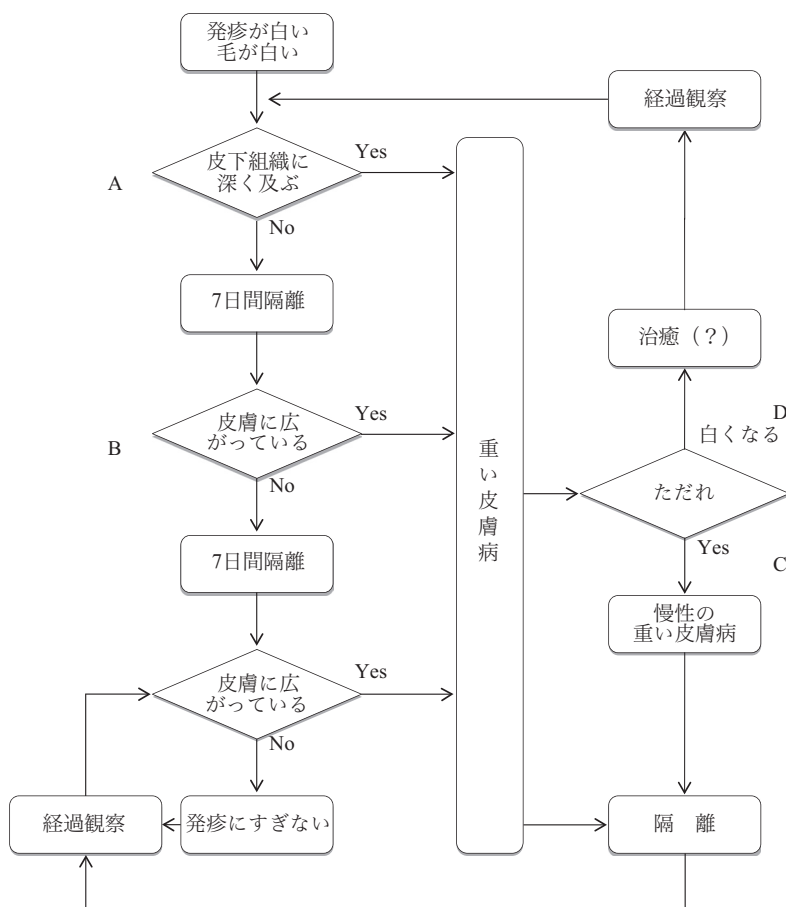


図 1

重い皮膚病の翻訳の変遷

新共同訳聖書は、旧約聖書が「ビブリア・ヘブライカ・シュトットガウテンシア（ドイツ聖書協会）」を、新約聖書が「ギリシャ語新約聖書修正第三版（聖書教会世界連盟）」を底本として翻訳されている。聖書の翻訳

は「できるかぎり、原文を完全に再現するために、忠実であり、正確であること」（新共同訳聖書）が原則である。忠実に、正確に翻訳すれば、逐語訳が最良の翻訳となるが、語句によっては対応する翻訳語がない場合がある。重い皮膚病の訳はその一例である。重い皮膚病の語源について表1に記した。重い皮膚病の語源はヘブライ語の *Zaraath* ツアラートで、ギリシャ語には *Lepra* レプラと翻訳されている。ツアラートとレプラはどちらも皮膚に白い粉状のものが出現する状態を指す。汚れを意味した宗教用語で、他の国の言語には対応する翻訳語がないとされている。ヘブライ語聖書のツアラートとギリシャ語聖書のレプラの宗教用語として翻訳上の大きな誤りはなかったと仮定できる。新約聖書における重い皮膚病に対する対処を見ると、イエスキリストは「清くなれ」¹⁸という言葉で清めの宣告をしている。旧約聖書の時代に祭司が「あなたは清い」⁸と宣告したところが類似している。対処法が似ていることからツアラートとレプラは宗教用語として同義語であると考えられる。

表1 重い皮膚病の語源

発音	ツアラート	レプラ	レプロシー
英語表記	Tzaraath	Lepra	Leprosy
言語	ヘブライ語	ギリシャ語	英語
用語分類	宗教用語		医学用語
特徴	皮膚表面に白い粉状のものが出現する症状 (衣服や家屋のかびも含む)		象皮病やハンセン病 で称される感染症
対処	祭儀的清め		医学的治療

医学用語としてのレプロシー

らい病は、感染症としての象皮病やハンセン病のことを指して称されていたが、それぞれ英語で表記すると *Leprosy*, *Elephantiasis*, *Hansen's disease* である。英語圏においてもこれらの言葉が混同されている。

医学英語の多くは既存の外国語を派生させた造語である。*hemophilia* 血

友病 (hemo 血, philia 好む), leukemia 白血病 (leuk 白い, emia 血液の状態) などギリシャ語の派生語が多数ある。Leprosy は Lepra レプラの派生語である。犀川は、ウルガタ・ラテン語聖書¹⁹が成立した時代の医学界において主導的立場にあったローマの医師ガレノス (AD131-202) が象皮病で皮疹を主症状とするものを Lepra と称したところに誤解の発端があると指摘している。

重い皮膚病患者の隔離

「症状が皮下組織に深く及んではおらず」¹¹疑わしいときは、観察するために最長で14日間隔離した (図1B)。重い皮膚病に罹っていると判定された場合は「この症状があるかぎり、(中略)宿営の外にすまねばならない」²⁰と宣言され隔離された。重い皮膚病になった場合は、その症状がなくなるまで隔離されるという規定である。隔離は身分に関わらず実施され、アザルヤ王²¹とウジヤ王²²も隔離された家に住んだ。新約聖書の時代には、重い皮膚病の人を隔離するための村²³があったと言われている。

重い皮膚病に対する偏見から生じる差別

新約聖書の共観福音書には、重い皮膚病の清めについて記述されている。共観福音書成立におけるQ資料説に従って、マルコによる福音書から述べる (図2a)。ベタニアの村にあるシモンの家での出来事で、一人の女がイエスに埋葬の準備として高価なナルドの香油を注いだ²⁴記事がある。マタイによる福音書 (図2b) とルカによる福音書 (図2c) でもほとんど同じ設定^{25, 26}で記述されており、ルカによる福音書では、イエス自身がシモンに呼び掛けている²⁶。このシモンはユダヤ教徒と記されている。一方、ヨハネによる福音書 (図2d) ではベタニアにあるラザロの家での出来事と

なっている。ラザロは「イエスがよみがえらせたラザロ」²⁷と記されているが、重い皮膚病を患っているかどうかは明記されていない。ルカによる福音書（図2e）では「ラザロというできものだらけの貧しい人」²⁸であり、金持ちの門の前で物乞いをしていたとして記されている。「できものだらけ」ということが、重い皮膚病であることと同じかどうかははっきりしない。皮疹の症状は多様で鑑別が難しいという考え方に立てば、重い皮膚病と混同されていたことが示唆される。ルカの記述が正確であるならば、白色の粉状を認める重い皮膚病とは異なる病態であると考えられる。したがって、ラザロは重い皮膚病と疑われ、差別により一般社会から締め出され、仕事にも就けず物乞いをするしか生活する手段がなかったと考えられる。

日本においてもハンセン病が疑われた患者は、血族もろとも正常な社会生活から締め出され、物乞いをして生活していたことと状況²⁹が類似している。以上から、ラザロは重い皮膚病を患っていたと仮定するとシモンとラザロは同一人物であったと示唆される。重い皮膚病のシモンの死後にラザロが住まいを受け継いだという説³⁰がある。しかしイエスキリストに香油を注いだ出来事は、イエスが十字架にかけられる数日前²⁷のことで同じ日の出来事として見るのが自然である。では、シモンとラザロが何故違う名で記されているのが疑問になる。ヨハネによる福音書がイエスキリストのモノローグを忠実に再現していると仮定すれば、ラザロは確かにラザロであったに違いないと考えられる。ルカは医者で、記述が正確であると仮定すれば、「できものだらけのラザロ」の記述も正しいと考えるべきである。症状も正しく記述されているとすれば、皮膚病を「できもの」と診断している。したがって、ラザロは重い皮膚病の疑いがもたれ差別を受けていたと考えられる。以上からラザロとシモンが同一人物であったと仮定すると、一方の名字が本名で他方が偽名となる。シモンが本名とすれば、偽名を使って物乞いをしていたのかもしれない。重い皮膚病を疑われたシモンは、ユダヤ人の由緒ある家柄でもあり、家の外ではラザロという名を

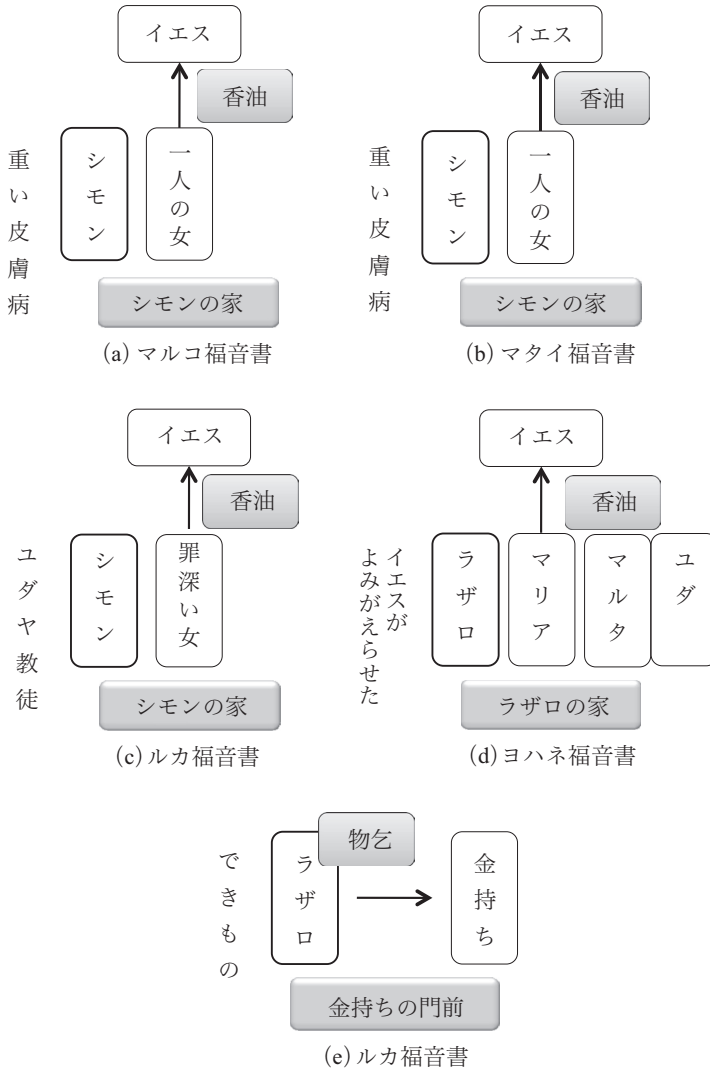


図2 共観福音書におけるシモンとラザロ

名乗らされた可能性がある。日本においてもハンセン病の疑いがもたれると長島愛生園などの施設に収容されたが、患者が入所する際に戸籍から抜かれ、出生が分からないようにするために名前も変えさせられた³¹という歴史がある。ハンセン病に対する偏見は、重い皮膚病に対する偏見と類似した構図を見ることができる。

ハンセン病と結核の比較

ハンセン病と結核は類似した歴史をたどっている（表2）。ハンセン病の原因菌はらい菌 *Mycobacterium leprae* である。1873年2月28年にノルウェーの医師アルマウエル・ハンセンによって発見された。それゆえ、らい菌の感染による病気をハンセン病と呼び、聖書に記載されている重い皮膚病と区別する基礎が築かれた。ハンセン病は感染症であり、重い皮膚病とは別物であると既に結論付けられている。しかし、20世紀になってもハンセン病が恐れられていたのは事実である。らい菌の顕微鏡像は細長い形態をしており桿菌に属する。らい菌の発見の9年後、1882年3月24日に、ドイツの医師ロベルト・コッホが結核 *tuberculosis* の原因菌である結核菌 *Mycobacterium tuberculosis* を発見した。結核は、当時まだ抗生物質がなく、不治の病として恐れられていた。結核菌の顕微鏡上も細長い形態をしており桿菌に属することから、菌の属名が *Mycobacterium* となっている。これら二つの病気は原因菌が発見されたのが同じ年代で、不幸にも原因菌の形態も同類であった。そのためか医学的に見て、らい菌によるハンセン病に対する脅威が増強されたものと推測される。近代科学が芽生えた19世紀に原因菌の発見によって悪い意味で科学的根拠に基づく解釈がなされていたと考えられる。

1873年のらい菌の発見、1882年の結核菌の発見に続いて、約70年後の1943年にプロミンのらい菌に対する臨床治療効果が発表され、1946年に

はストレプトマイシンの結核菌に対する臨床治療効果が発表された。これらの抗生物質の発見によりハンセン病も結核も不治の病ではなくなった。同時代に原因菌が発見され、同時代に治療法が確立された。日本では公衆衛生上、伝染病隔離政策がとられている。結核は聖書には記述がなくても、その強い病原性と強い感染性のため、結核菌に感染の疑われる患者は隔離される。一方、らい菌は病原性があるものの、感染性は弱いため、通常の風邪と同様に隔離する必要はない。しかし、らい菌は末梢神経に感染すると知覚麻痺を生じ顔面や四肢に外傷性変形をもたらし、完治していても外見上の障害のため病気だと間違われやすいという特徴をもっている。

表2 ハンセン病と結核

病 名	ハンセン病	結 核
学 名	Leporosity	Tuberculosis
原因菌	らい菌 Mycobacterium leprae 1873年 ノルウェー アルマウエル・ハンセンが発見	結核菌 Mycobacterium tuberculosis 1882年 ドイツ ロベルト・コッホが発見
菌の特徴	細長い桿菌 接触で感染しない	細長い桿菌 接触で感染する
症 状	末梢神経障害による知覚麻痺。 顔面や四肢に外傷性変形が生じ、障害が残る。	菌が寄生した器官の細胞が破壊される。 初期は無症状。
治療法の発表	プロミンの治らい効果 1943年 アメリカ ファージェット	ストレプトマイシンの治結核効果 1946年 アメリカ ワックスマン
本邦の法律	らい予防法 1996年に廃止	結核予防法（存続）

レビ記の規定を遵守する際の問題点

レビ記の中に、障害のある者は「神に食物をささげる務めをしてはならない」³²という記述はあるが、障害のある者を隔離する規定は記されていない。重い皮膚病に疑われやすい「できもの」のある者も隔離する規定は

記されていない。顔面や四肢の変形は障害であり、重い皮膚病の症状には該当しないので、ハンセン病患者を隔離する必要はなかったはずである。らい菌に侵されて外見に障害をもったハンセン病患者を隔離することは、レビ記の規定からみて不適切なことである。レビ記の規定は複雑で、顔面や四肢に障害を持った人に対してレビ記の規定を正しく適用できなかったため、顔や四肢に障害を持ったハンセン病患者が誤って重い皮膚病と判断されたと考えられる。

結 論

聖書の原本としてヘブライ語聖書からの翻訳の過程で、宗教用語としてのツァラートが医学用語のらい病に置き換わったことが、らい病に対する偏見を強固なものにした。聖書のらい病とハンセン病について医学的に区別できるようになったのは19世紀に入ってからである。20世紀には治療法の発見によりハンセン病が克服できるようになった。しかし、治療法の確立以降もハンセン病患者は聖書の中の重い皮膚病患者のごとく差別された。聖書が成立したころ皮膚病を鑑別するのは祭司の役目であった。レビ記の規定にもとづいて正しく判断すれば、重い皮膚病と他の皮膚病を区別できた。しかし、皮膚疾患は多様な病態を示すので判断には経験と熟練を要する。レビ記の規定そのものは完全であってもそれを使って判断する祭司は人間である。レビ記の規定は大変複雑で正しく適用できなかったため、顔や四肢に障害を持ったハンセン病患者を誤って重い皮膚病と判断し隔離したと考えられる。一度前例ができると顔や四肢に障害があるだけで隔離するという行為だけが習慣化し、ハンセン病に対して治療法が確立してからも漫然と隔離が続けられたのである。この習慣化がハンセン病患者を隔離から解放するのを遅らせた一因であると推測される。

聖書の翻訳の不確かさがハンセン病患者を差別する原因となっているこ

とを指示する報告もあるが、聖書の読者がレビ記21章に書かれている規定に忠実に従って正しく判断していれば、むしろハンセン病患者を隔離から早期に解放する役割を果たすことができたのではないかと考えられる。

参考文献

- 犀川一夫 『聖書のらい』 新教出版社、東京、1994年。
蝦名賢造 『石館守三伝』 新評論、東京、1997年。
共同訳聖書実行委員会 『聖書新共同訳』 日本聖書協会、東京、2005年。

引用文献

- 1 高坂健二ら、ヌードマウスによる実験らいの確立：日本細菌学雑誌33(2), 389-394, 1978.
- 2 犀川, p. 66-69, 「古代オリエントのハンセン病」
- 3 出エジプト記4：6「主は更に、「あなたの手をふところに入れなさい」と言われた。モーセは手をふところに入れ、それから出してみると、驚いたことには、手は重い皮膚病にかかり、雪のように白くなっていた。」
- 4 民数記12：10「雲は幕屋を離れた。そのとき、見よ、ミリアムは重い皮膚病にかかり、雪のように白くなっていた。アロンはミリアムの方を振り向いた。見よ、彼女は重い皮膚病にかかっていた。」
- 5 列王記下5：27「ナアマンの重い皮膚病がお前とお前の子孫にいつまでもまといつくことになるのに。」ゲハジは重い皮膚病で雪のようになり、エリシャの前から立ち去った。」
- 6 レビ記13：2-3「もし、皮膚に湿疹、斑点、疱疹が生じて、皮膚病の疑いがある場合、その人を祭司アロンのところか彼の家系の祭司の一人のところに連れて行く。祭司はその人の皮膚の患部を調べる。患部の毛が白くなっており、症状が皮下組織に深く及んでいるならば、それは重い皮膚病である。祭司は、調べた後その人に「あなたは汚れている」と言い渡す。」
- 7 永井弥生ら、褥瘡に対する記載潰瘍学の確立とその有用性：日本褥瘡学会誌11(2), 105-111, 2009.
- 8 レビ記13：6-7「七日目に再び調べ、症状が治まっていて、広がっていなければ、

- 祭司はその人に「あなたは清い」と言い渡す。それは発疹にすぎない。その人は衣服を水洗いし、清くなる。しかし、祭司に見てもらい、清いと言い渡された後に、その発疹が皮膚に広がったならば、その人はもう一度祭司のところに行く。」
- 9 レビ記13：10-11「祭司が調べて、皮膚に白い湿疹が生じ、その患部の毛が白くなっており、湿疹の部分の肉がただれているならば、皮膚は慢性皮膚病にかかっている。祭司はその人に「あなたは汚れている」と言い渡す。その人が汚れているのは明らかであるから、隔離してみる必要はない。」
- 10 レビ記13：30「祭司はそれを調べる。症状が皮下組織に深く及んでおり、その毛が薄く黄色みを帯びているならば、祭司はその人に「あなたは汚れている」と言い渡す。それは白癬で、頭やあごにできる重い皮膚病である。」
- 11 レビ記13：4「しかし、皮膚の疱疹が白くて症状が皮下組織に深く及んではおらず、患部の毛も白くなっていなければ、祭司は患者を一週間隔離する。七日目に祭司が調べて、患部が以前のままで、広がっていなければ、もう一週間隔離する。」
- 12 レビ記13：13「祭司はそれを調べ、確かに全身を覆っているならば、「患者は清い」と言い渡す。全身が白くなっていれば、その人は清いのである。」
- 13 福井基成『決定版褥瘡治療マニュアル』照林社、東京、1999年。
- 14 レビ記13：18-19「もし、皮膚に生じた炎症が一度治ってから、その跡に再び炎症が起きて、白い湿疹か、赤みがかった白の疱疹ができたならば、その人は祭司にその個所を見せる。」
- 15 レビ記13：24-25「皮膚にやけどをして、それがただれて、赤みがかった白か、白の疱疹となった場合、祭司がそれを調べ、疱疹の部分の毛が白く、それが皮下組織に深く及んでいるならば、それはやけどの跡に広がった重い皮膚病である。祭司はその人に「あなたは汚れている」と言い渡す。それは重い皮膚病である。」
- 16 レビ記13：31-33「祭司が調べて、白癬の症状が皮下組織に深く及んでいるようには見えないが、その部分に黒い毛が全くなければ、祭司はこの患者を一週間隔離する。七日目に調べて、白癬が広がっておらず、患部に黄色みを帯びた毛がなく、白癬が皮下組織に深く及んでいるように見えなければ、患者は自分で患部の周りの毛をそり落とす。祭司はその人を更に一週間隔離する。」
- 17 レビ記13：39「祭司はその個所を調べる。その疱疹がにぶい白色ならば、それは白皮症が皮膚に広がっているものであって、その人は清い。」
- 18 マルコ福音書1：40-42「さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできに

ります」と言った。イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。」

- 19 ローマ帝国が地中海沿岸地域にまで勢力を伸ばしたころギリシャ語に代わってラテン語が使われるようになり AD405 にウルガタ・ラテン語標準訳聖書が成立した。ウルガタ聖書では70人訳聖書をギリシャ語からラテン語に翻訳したものである。その時もレブラは機械的にラテン語の *Lepra* に置き換えられた。ウルガタ・ラテン語聖書は各国語への聖書に翻訳する際に大いに参考にされたため、ハンセン病への偏見と差別が世界に蔓延したというのが定説である。
- 20 レビ記13：46「この症状があるかぎり、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない。」
- 21 列王記下15：5「主が（アザルヤ）王を打たれたので、王は死ぬ日まで重い皮膚病に悩まされ、隔離された家に住んだ。王子ヨタムが王宮を取りしきり、国の民を治めた。」
- 22 歴代誌下26：21「ウジヤ王は死ぬ日までその重い皮膚病に悩まされ、重い皮膚病のために隔離された家に住んだ。」
- 23 荒井英子：「ベタニア＝らい病人隔離村」説をめぐって：神殿の巻物46・1618 とマルコ福音書14：3との関連、キリスト教史学52, 52-70, 1998.
- 24 マルコ福音書14：3「イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。」
- 25 マタイ福音書26：6「さて、イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家におられたとき、一人の女が、極めて高価な香油の入った石膏の壺を持って近寄り、食事の席に着いておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた。」
- 26 ルカ福音書7：37-40「この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。（中略）そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。
- 27 ヨハネ福音書12：1-3「逾越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。イエスのためにそ

こで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。」

- 28 ルカ福音書16：20-21「この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。」
- 29 蝦名, p. 29「その頃、たいがいのお寺にいた乞食というのは、ほとんどらい患者である。みんなから放り出されるから乞食になったのだ。それのみでなく、この地方（青森市の郊外）では先祖ないし親類に一人でもそれらしい病人があった場合は、その血族全体が社会から全く無視されて、正常な生活から締め出される。」
- 30 犀川, p. 85「シモンの死後、この家はラザロと、その姉妹・マルタと、マリアに譲られたと思われる。」
- 31 立花明彦, 先達に学び業績を知るハーモニカは人生の道標—近藤宏一が追い求めた“青い鳥”：視覚障害(260), 17-27, 2010.
- 32 レビ記21：18-21「だれでも、障害のある者、すなわち、目や足の不自由な者、鼻に欠陥のある者、手足の不釣り合いの者、だれでも、障害のある者、すなわち、目や足の不自由な者、鼻に欠陥のある者、手足の不釣り合いの者、手足の折れた者、背中にこぶのある者、目が弱く欠陥のある者、できものや疥癬のある者、睪丸のつぶれた者など、祭司アロンの子孫のうちで、以上の障害のある者はだれでも、主に燃やしてささげる献げ物の務めをしてはならない。彼には障害があるから、神に食物をささげる務めをしてはならない。」